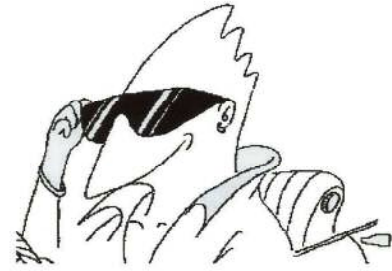


## KOBANには何故、髭があるのか？



Tomy Jr.

前回は、「デザイン」と「アート」の違いについて、デザインには理由が必要でありアートに理由は要らない、と述べました。では、「デザイン」と「デコレーション」の違いはどうでしょう？

“あるモノを綺麗に美しく仕上げること”と考えれば、この両者は目的も手法も一見同じような気がしますが、私の考えではこの両者は全く逆のプロセスなのです。

ひとつ事例を見てみましょう。Case-1は皆さんも街角でよく見かけている交番の看板です。日本の交番システムは犯罪防止に役立つと評価され、海外でも外来語で「KOBAN」という表記で街角に導入されていると聞いたことがあります。国内でも外国人増加という事情から欧文表記の必要があり、その際「Police Box」ではなく「KOBAN」を用いたのでしょう。

### Case-1



ここで看板（サイン）の構成要素に注目してみましょう。看板部分を単純に拡大表示したのが下の左側の写真 A です。よく見ると「KOBAN」という文字と警視庁のマスコットである「ピーポ君」の絵の他に左右 2 箇所には何か髭のようなものが描かれていますね。



この写真 A にある、髭のようなものはいったい何なのでしょう？

「KOBAN」というローマ字の上字符（長音表記）でもないし、そもそも文字ではないようです。かといって「ピーポ君」の絵の一部でもなければ背景の一部でもないようです。はっきり言って意味不明の模様（文様？）だと思いませんか。試しにこれを画像修正によって消してみたのが右の写真 B です。下手なレタッチ処理で申し訳ありませんが、どうでしょう、少なくとも街を歩く我々にとってこの看板が意味するところは何も変わらないと思いませんか。では、この髭以外の要素はどうでしょうか。思い切って消してみましょう。

まず「ピーポ君」も消したのが下の写真 C です。「KOBAN」という文字だけになってしまいましたが、こうなるとローマ字の特性として漢字と違い「交番」なのか「鋼板」なのか、それとも「小判」なのか、よく分かりませんね。やはり警察官の格好をした「ピーポ君」の存在はサインの構成要素としての機能を果たしているようです。では逆に「ピーポ君」を残し、「KOBAN」の文字を消してみたらどうなるかというのが下の写真 D です。レイアウトや絵の大きさの調整は別にしても、そもそも絵だけの看板というのはちょっと不気味で意味不明ですね。やはり「KOBAN」という文字もサインの必須構成要素のようです。



上記のことから、この看板の制作プロセスは次のようであったと想像できます。

- ① まず看板の表記文字としては外国人も読めるローマ字表記をすることとし、外来語にもなっている「KOBAN」を採用した（写真 C の状態）。
- ② さらに警察のシンボルであり市民に親しまれている（かどうか分かりませんが）マスコットである「ピーポ君」も加えた（写真 B の状態）。
- ③ そして、何故かわかりませんが、そこに謎の模様（文様）を加えた（写真 A の状態）。

もうお分かりと思いますが、「デザインには理由が必要である」という私の考えからいけば、プロセス②によって出来た写真 B まではデザインですが、プロセス③によって写真 A の状態にしてしまうことはデザインではないということになるのです。では、いったいそれは何と呼ぶべきでしょうか。その前にこのプロセスの動機を考える必要があります。

このサインを担当したデザイナーは一体、何を考えてプロセス③を行ったのでしょうか？

これは想像ですが、プロセス②で写真 B の状態になった時、何か「間がもたない」「間が抜けた」「何となくさびしい」あるいは「空間の納まりが悪い」感じがして、おもわず空いた空間を何かで埋めたくなくなったのではないかと思います。そして、特に意味は無いけどなんとなく間をもたせる模様を付け足した、こういうことではないかと思います。これは必須ではないものを付け加えるプロセス、つまり装飾（デコレーション）です。そして冒頭に申し上げたように、私の考えるデザインとは、デコレーションとは全く逆のプロセスであり、不要なものを徹底的に排除していくプロセスなのです。その根拠はデザインという言葉の語源に求めることができます。

デザインのスペルは **design**、つまり **de・sign** ですから、デザインとは、余計な記号 (**sign**) を排し(**de**)、本当に必要な、意味のある機能を果たす要素のみを残す、ということです。

従ってこのサインを担当したデザイナーはデザインの仕事をしていません。デコレーターになってしまったと言えます。本来、写真 B の状態で「間が抜けた」「間が持たない」状態になっているとしたら、それはそもそも看板の形や縦横比率から見直しを行い、文字の大きさ、背景や絵の大きさ、レイアウトなどを徹底的に検討するのがデザイナーの仕事です。

しかし彼（または彼女）にも事情があるかも知れません。もし、彼に看板の形や大きさを考える権限が与えられず、既に施設の都合から決定されており、文字や絵の要素や大きさその他の要素も予め指定されていたとしたら...？そこにはデザインの不出来に関して責めを受けるべきデザイナーがそもそも不在だったとしか言いようがないではありませんか。

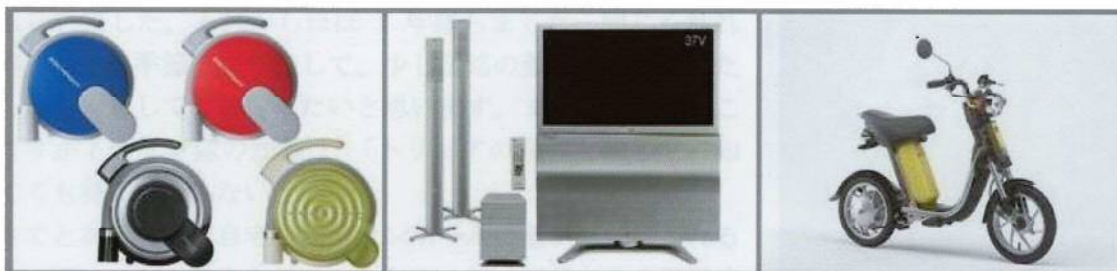
## Case-2



次は自動車の側面の写真です。左の銀色の車は左右に何本もの線（凹凸の線を含め）が走っています。これらの線 1 本 1 本に本当に必要な機能や意味があるのでしょうか？鋼板の強度を高めるための凹凸というのは実際には曲面加工で済むと思いますので現実的ではないと思います。一方、右の青い車にはほとんど線が見当たりません。唯一、サイドガードの

ゴムラインがあるだけです。当然、このゴムラインは必要な機能を持っていますので左の車にもありますが、右の車の方はゴムもボディカラーと同じ青色に処理されていてとてもシンプルに一体化して見えます。一方、左の車の場合、(私の拙いレタッチ処理では他の線を画像処理でうまく消すことが出来ませんので)もし下の黒いゴムラインを残して他の凹凸の線を無くしたと想像してみると、何となく「間が持たない」「間が抜けた」空間が広がる感じになって、何か線を引きたくなってしまいう気がします。勿論、これは勝手な想像ですが、やはり他の線(凹凸)は、私にはデザインの敗北によるデコレーション処理のような気がしてなりません。

### Case-3



ここに挙げた写真は左からコードレスクリーナー(掃除機)、ホームプロジェクター、スクーターですが、いずれもあのGマークでお馴染みの Good Design 2003 の金賞に選ばれた作品の一部です(写真は同賞 web より)。ここにあるものに限らずデザイン的に優れていると評価されるモノを見た時に感じる印象に「シンプルさ」があると思いませんか。“Simple is Best”という言葉がありますが、この言葉はエンジニアリングの領域で通用するのみならず、デザインの世界でも通用する言葉だと思います。Simple を目指そうとすれば、余計なものをできるだけ排除しますから、これはまさに De-Sign の発想そのものであるからです。ここには当然、無駄な装飾を施す行為(デコレーション)が入りこむ余地はありません。

### これらのケースから私が考えること

デザインはアートと違って、そこに何故それをそうするかという理由が必要です。つまり、それらは何らかの機能や役割などの“意味”(sign)を持っていないとはなりません。そして、その意味を徹底的につきつめて吟味し、余計な要素をことごとく排除(de)し、本当に必要な“意味”だけを残していくプロセス、それがデザインの本質であると思っています。

もし、デザインの対象物にまだ何か意味のないものが残っていたとしたら、それはデザインが十分に尽くされていないということであり、デザインを進めていけばそういう要素は削られて無くなっていくはずで、間違っても何かを装飾的に付け加えるプロセス(デコレーション)ではないはずで、

世の中には、まだまだデザインとデコレーションの区別がつかない、いや、デザインをデコレーションだと思っている人が多いようです。それが証拠に、ある製品に付いている模様や凹凸について「これには何の意味があるのだろう」と聞くと「ああ、それは何の意味も無いよ、ただのデザインでしょう。」なんて返事が返ってきます。「それを言うなら、せめてデコレーションと言って欲しいなあ」と密かに思いながら、でも黙って耐えています。

(2004.1.18)